

## 武蔵野日曜集会

## 我を愛するか

――ヨハネ伝21章――

1968年8月11日

小池辰雄

子どもも獲物ありしか 我を愛するか アガパオーとフィレオー 一人称二人称の関係 キリストと私の関係は贖罪 汝知りたもう 活殺自在 伝道と殉道 パウロやヨハネはわが親友 信愛一如

## 【ヨハネ21】

1 この後、イエス復またテベリヤの海辺にて己を弟子たちに現し給う、その現れ給いしこと左のごとし。<sup>2</sup> シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、<sup>3</sup> シモン・ペテロ『われ漁獵すなどりにゆく』と言え、彼ら『われらも共に往かん』<sup>4</sup> と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。<sup>5</sup> 夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、<sup>6</sup> イエス言ひ給う『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。<sup>7</sup> イエス言ひたもう『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』すなわち網を下ろしたるに、魚夥多おびただしくして、網を曳ひき上ぐること能わざりしかば、<sup>8</sup> イエスの愛し給ひし弟子、ペテロに言う『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸なりしを上衣うわぎをまといて海に飛びいれり。<sup>9</sup> 他の弟子たちは陸を離るること遠からず、僅わずかに五十間けんばかりなりしかば、魚の入りたる網を小舟に曳き来り、<sup>10</sup> 陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴さかなあり、又パンあり。<sup>11</sup> イエス言ひ給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』<sup>12</sup> シモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾びの大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂けざりき。<sup>13</sup> イエス言ひ給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。<sup>14</sup> イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴さかなをも然しかなし給う。<sup>15</sup> イエス死人の中より甦よみがえりてのち、弟子たちに現れ給ひし事、これにて二度なり。

<sup>15</sup> 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言ひ給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝まさりて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言ひ給う『わが羔羊こひつじを養え』<sup>16</sup> また二度



いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羊を牧え』<sup>17</sup>三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。<sup>18</sup>誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』<sup>19</sup>是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顯すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。<sup>20</sup>ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これはさきに夕餐のとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問いし弟子なり。<sup>21</sup>ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』。<sup>22</sup>イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの關係あらんや、汝は我に従え』。<sup>23</sup>ここに兄弟たちの中に、この弟子死なずと云う話つたわりたり。然れどイエスは死なずと言ひ給いしにあらず『よしや我かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの關係あらんや』と言ひ給いしなり。

<sup>24</sup>これらの事につきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等はその証の真なるを知る。<sup>25</sup>イエスの行い給いし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。

### ●子ども獲物ありしか

いよいよ、ヨハネ伝21章、最後の章にまいりました。多分、これは1年半くらいかかりましたかね。この21章の記事はヨハネ伝だけです。<sup>25</sup>節でお終いか。ただ似たような記事がルカ伝5章にありますが、似たようなことがまたここに起きているわけです。

#### 1 この後、イエス復テペリヤ

ゲネサレ、ガリラヤ湖のことです。

の海辺にて己を弟子たちに現し給う、

南の方のエルサレムかと思つたら今度はガリラヤ。

「お前たちよりも先にガリラヤに行く」

と約束されたことが前にありますが、そのとおりガリラヤに行つて現れた。

その現れ給いしこと左のごとし。<sup>2</sup>シモン・ペテロ、デドモと称うるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及びほかの弟子二人もともに居りしに、



その中にはヨハネもいるわけです。

<sup>3</sup> シモン・ペテロ『われ漁獵<sup>すなどり</sup>にゆく』と云えば、彼ら『われらも共に往かん』

といい、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。<sup>4</sup> 夜明の頃イエス岸に立ち給うに、弟子たち其のイエスなるを知らず、

見ても見えない、認識しないというわけです。

<sup>5</sup> イエス言い給う『子どもよ、

「お前たち」という、可愛がつて言う言い方です。

獲物ありしか』彼ら『なし』と答う。<sup>6</sup> イエス言いたもう『舟の右のかたに

網をおろせ、然らば獲物あらん』

ルカ伝の方の5章4節には、

「<sup>4</sup>……深処<sup>ふか</sup>に乗りいだし、網を下して漁<sup>すな</sup>れ」（ルカ5:4）

と言われたですね。ここは舟の横ちよにいる。お前たちは灯台下暗しだと。

すなわち網を下ろしたるに、魚夥<sup>おびただ</sup>しくして、網を曳<sup>ひ</sup>き上ぐる<sup>こと</sup>能わざり

しかば、<sup>7</sup> イエスの愛し給いし弟子、

即ちヨハネ、

ペテロに言う『主なり』

「主だよ」と。さすがにこのヨハネというのは非常に勘がいい。復活の時に、弟子の中で一番先にキリストを信じたのがやはりヨハネです。ペテロの方はまだちょつと驚いたり疑問に思ったりしましたが、ヨハネは即刻信じてしまった。信じ入ることの深さはヨハネが一番ですね。非常にスツとしているわけです。パウロは非常に劇的な男ですが、ペテロは、申し上げているとおり、波のような男です、浮いたり沈んだり。ヨハネはスーツと入ってしまう。

シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、

「そうか、主か」と。

裸なりしを上<sup>うわぎ</sup>衣をまといて海に飛びいれり。

これはまたペテロらしい。

<sup>8</sup> 他の弟子たちは陸<sup>おか</sup>を離るること遠からず、僅<sup>わずか</sup>に五十間<sup>けん</sup>ばかりなりしかば、魚の入<sup>い</sup>りたる網を小舟に曳き来り、<sup>9</sup> 陸に上がりて見れば、炭火ありてその上に肴<sup>さかな</sup>あり、又。パンあり。

「魚とパン」はよく、この前も共観福音書で、「パンが五つに魚が二つ」ですか、何千人という人に食わしたという話がありました。ここにも「魚とパン」が出てくる。

<sup>10</sup> イエス言い給う『なんじらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』<sup>11</sup> シモン・

ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げしに百五十三尾<sup>び</sup>の大なる魚満ちたり、

「<sup>153</sup>」と数えた。これは事実そう思いたいわけです。ところが、学者というのはすぐいろん



なことを、また別なことを思いまして、この「153」という数は、ユダヤの「カバラ」という神秘的な消息の文書があるんですが、そこに「153」という数は過越の小羊のシンボルの数であるという。そういうことがある。それとこれがパツタリ数が合ってしまうものだから、

「ははあ、この「153」という数は実際は、本当は「153」ではなかったけれども、キリストが過越の羔羊であるから、それにちなんでこのところは「153」にしたのだろう」

というようなことを言うわけです。まあそうかもしれません。象徴的な数だという。

斯く多かりしが網は裂けざりき。<sup>12</sup> イエス言い給う『きたりて食せよ』弟子たちその主なるを知れば『なんじは誰ぞ』と敢えて問う者もなし。

先にこのヨハネが言ってしまったものですからね。

<sup>13</sup> イエス進みてパンをとり彼らに与え、肴をも然なし給う。

ここでもキリストは、パンと魚を与えた。

<sup>14</sup> イエス死人の中より甦えりてのち、弟子たちに現れ給ひし事、これにて三度なり。

復活のキリストがまた彼らに、しかもこれは夜明け、もう明け方ですから、太陽が昇ってから現れた。いかにこの復活のキリストがまた人をすなざらんとすることを弟子たちに象徴的に顕されたかということだろうと思われます。

## ●我を愛するか

<sup>15</sup> 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、

汝この者どもに勝りて我を愛するか』

彼らよりも一番、お前が私を愛するかねと。これがやはり、「アガパオー」という、非常に高次な「愛する」という言葉がこの場合に使っております。「私をアガパオーするか」と。

ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

「今までこうやっておつかいしてきたので、あなたを愛していることはご存じのとおりです」

と。この場合のペテロの「愛する」という言葉が今の言葉とちよつと違う。これは「フィレオー」という言葉が使っている。

イエス言い給う『わが羔羊を養え』

そうしたら今度は、イエスがそれに対して何を言われたかというのと、「私の羔羊を養いなさい」と。もちろん、「羔羊」ということは伝道のことを意味するわけですが。

<sup>16</sup> また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

この「愛する」もさっきの「アガパオー」という字。





ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』  
これも違う言葉です。

イエス言い給う『わが羊を牧え』

今度は「羊」という字にちよつと変わっていますが。

17三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

今度はこの「愛する」という言葉を、ペテロが使った同じ言葉を使われたわけです。

ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』

これがやはり、「フィレオー」の方ですね。

イエス言い給う『わが羊をやしなえ。18 誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』19 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。20 ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これはさきに夕餐のとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問いし弟子なり。

これはヨハネです。

21 ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』22 イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、

これは再臨のことです。

汝になにの關係あらんや、汝は我に従え』

という問答がここにあるんですが。

ヨハネ伝の最後に、

「この21章の記事はもともとヨハネが確かに語ったことであつて、それをヨハネの弟子たちが伝えたのだ」

ということ、24節をみると、

24 これらの事につきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、

「この弟子」というのはヨハネ。

我等はその証の真なるを知る。

「我等」というのはこのヨハネの門弟たち。こう普通、学者もみているようです。

### ●アガパオーとフィレオー

「愛する」という言葉に二通り使つてありますが、非常に簡単にいえば、「フィレオー」という言葉は「好きだ、好む」という字です。「アガパオー」という方は、相手に己を与える



ような愛です。人間の感情の愛というものは、恋愛というのものもあるし、いろいろありますが、要するに、「アガパオー」という神的な愛が中心であることは、信仰者の極めて大事なことですけれども、人間が人間であるかぎり、好きだという面もあるし、感情にはいろいろなものがつきまとっているのは、これは具体的な人間ですよ。キリストだってそうだと。マリヤだとか、マルタだとかというご連中は、

「キリストが愛していた」

というのは、普通の「フィレオー」という字が書いてある。ティリツヒという神学者も言ってますけれども、

「もし、アガパオーだけの愛であつたら、その人間はむしろ観念的である。また、『好む、好きだ』という愛であつたら、それは単なる肉的なものである」

と。具体的な人間というものはどちらの要素も持っていて、しかも、大事なことはこちら（アガパオー）が主導的であるということ。そういう、人間の心の動きというものは決して分析しきれものではない。

「相手に己を与える」

ということとは、

「相手を救いあげる」

ということです。救いあげる、担いあげるという角度の愛がこの愛（アガペー）です。もちろん、この愛とこの「好む」（フィレオー）というのが相反する場合も、それは具体的な場合にもあるでしょう。それから、並行してくるような場合もあるでしょうし。

「この愛でなければならぬ」

というような、何か狭苦しいようなことを言っても、それは本当の具体的な人間ではない、ということでしょう。

私たちが今、特に主題としようとするのは、そういった愛の分析でも何でもありません。このところで、キリスト自身が両方の言葉を使っていらいっしょなところに、いかにキリストがまた自由な方であるかということもわかるわけです。

「何者にも勝<sup>まさ</sup>つて私を愛するか」

と。キリストがこのような愛を求められたところは、他の共観福音書にもあるとおり、

「我よりも父母、何々を愛する者は我にふさわしからず」

と言っておられる。

### ●一人称二人称の関係

私たちは、「信仰」とか何とか言いましても、「信ずる」ということと「愛する」ということを何か別問題のように考えている人がよくあるわけです、クリスチャンなんていいしましても。けれども、私たちが



「神を信ずる」

ということとは、なにも神の存在を信じているのではない。神の存在を客観的に信じるなんていうことは、いわゆる

「客観的に信ずる」

なんてことはありえない。神さまというものを客観的に信ずるといえるのはどういうことだと。そんなことはありはしない。

神というものは私たちにいつも、「汝」という、「われと汝」という関係で主体的に迫ってくるものが神である。第三人称的に、客観的に第三者的に、神というものが関係付けられるものではない。それは考えられたる神にすぎない。活ける神というのは、考えられた神とは違う。活ける神というのは、一人称、二人称の間でなければありえない。そういう関係においてある。三人称的に神のことを言うということは、「について」語っているだけのなし。神について語り、神について、思考しているだけのなし。しかし、「神を」と言うときには、それは文法的には三人称的な言い方であつても、本当に神のことを言うときには、それはどこまでも自覚は、一人称と二人称の間、対称的な間です。その間においても、言われていなければ、本当に

「神を語る」

ということにはならない。

だから、私が言いますように、これは神の前における告白であつて、あなた方に対する説教ではない。その神は、しかしながら、私にとってまたあなた方自身にとりましても、どこまでもキリストにおいて顕れた神です。旧約聖書は、キリストにおいてではないけれども、旧約聖書における神を本当につかまえるためにはやはり、キリストの光において旧約というものが本当に読まなければ、旧約の神すらも本当につかむわけにいかない。キリストというのはどこまでも神の具体的な現象面で、それを通して私たちには端倪すべからざる神を受けとる。キリストにおいてこそ神が信ぜられる、受けとれる。神を告白する。

「神を告白する」

ということ

「神を信ずる」

ことは一つのことになる。

それでは、キリストと我との関係は何か。この関係は、

「我もし汝の足を洗わなかったらかかわり関係なし」

と言われたところにある。キリストと私との関係は、ローマ書7章にもあるように、

「ああ、悩める人なるかな、この死のからだ」

と言つて、自分を投げ出さなければならない。しかし、



「イエス・キリストなるがゆえに感謝する」

と。これは即ち、自分の足を本当に洗ってくれたキリストである。贖罪をしてくれたキリストである。

### ●キリストと我の関係は贖罪

贖罪というのは要するに、「自分を贖いとった」ということだ、徹底的にはつきり言えば。自分というやつを本当に贖いとった。サタンから贖いとった。これはサタンの勢力の中にあるのだから。罪と死と陰府よみの虜とりこになつてゐる、そういうものから贖いとった。これが即ち、キリストです。だから、キリストと我との関係はその贖罪においてある。それは十字架でもいい。無教会でもしよつちゅう「十字架」と言つてゐるけれども。そのようにして贖いとったものは何かというと、キリストが己を与えた「アガパオー」である、愛である、「アガペー」である。このアガペーという事態が、キリストと我との関係です。それはもうひとつ神から言えば、

「神の義がそこに顕れた」

という。これがローマ書3章で言つてゐるところの、神の義が顕れる。キリストの贖罪、という愛の行為によつて、神の義が顕れる。

「神の義は福音のうちに顕れた」

というのがそのことです。また、

「愛せよ」

と言うことのできる人は、キリストだけです。キリストは事実、私たちをまず愛してくれた、どん底から。キリストと私たち一人びとりとの関係は、そのようにしてキリストは私たちを救いあげた。救いあげたというのに、それを受けとらなければそれだけののはなしです。

「いや、私はそんなことは信じません」

なんて。ああどうぞ信じなくなつていいですよ。しかし、キリストは私たちを、私を、あなた方一人びとりを救つた。これがその関係です。キリストは愛した。だから、いいですか。

「汝、我を愛するか」

と問われた時に、その問う人が、

「お前を本当に私は誰よりも——誰がお前を愛するか。お父さんが、お母さんが、友だちが、先生が愛するよりも——私はお前を愛した。何びとよりも勝りて我は

汝を愛した」

と、キリストはそれが言える人なんだ。キリストはかく一人びとりに語つておられる。実力をもつて語つてゐる。それは、実は十字架の贖罪ばかりではない。この贖罪のあとに本当に生命を与える。

「私がお前を愛するのは、この生命を与えるため、永遠の生命を与えるためだ」





と、ヨハネ伝が言っているとおりの「永遠の生命」を与えるには、どうしてもまず、贖いとらなければ、永遠の生命をやるわけにはいかない。死そのものに生命をやったってダメなんだ。死を滅ぼしてしまわなくては。罪そのものを、罪とか死というものの主体を滅ぼしてしまった。罪の主体であり、死の主体である「我」というものをやつつけてしまつて、そして今度は、永遠の生命を与える。まあ何という凄い愛し方か。こんな愛し方は他にはありはしない。だから、

「何ものよりも、世の中のいかなるものよりも、どんなにお前と密接な関係の人たちよりも、私はお前を愛した」

と。そうでしょ。誰が私たちの生命を救ってくれるか。人間の誰が救ってくれるか。誰が罪を本当に贖ってくれたか。キリストのほかにこれだけのことをしてくれたものはない。

### ●汝知りたもう

「信仰、信仰」なんて言つたつて、キリストの愛に圧倒されなくて何が信仰かと。私はもう「信仰」なんて言うのは嫌になつてしまつた。もう「愛」だけでたくさんだ。キリストの愛に徹底的に圧倒される。無教会が

### 「十字架、十字架」

なんて言っているが、本当にそれを受けとっているか。命懸けで十字架から本当に生命を与えている、死んでも死なない生命を与えているところの、この実質は聖霊です。無教会だつてそういうことを言いますよ――私は今日は少し癪にさわっているから、無教会のことを言うんだけれども――そういうようなことは言ひましても、何を言つてるか。私は無教会の本流に棹さしていたからよく知っている。

何といつても、ヨハネ伝は聖霊の書といつてもいいくらいです。ヨハネは聖霊の人です。この御霊がその愛の、生命の実質である。キリストの霊が。実はさっきの讃美歌に、

### 「御霊よ、くだりて」

とあるが、それはいいですよ。いいんだけど、私には実際に正直、くだっているんです、御霊が。ですから、なにかちよつと歌詞がしつくりこない。くだつてしまっているものですよ、御霊が来てしまっているんですよ、私の中に。

### 「ずいぶん、先生は勝手なことを言うな」

と思うかもしれません。私はもう正直、そうでなかったら生きていられないものですからね。だから、フツと気がついてみると、もうちゃんとこの聖霊の世界にあるわけです。ヨハネが慕わしくしようがないのは、そういうことです。どうぞ、若い方だつて、

### 「まあ先生くらいに歳とらなければそうならないか」

なんて、そうじゃないですよ。あなた方だつてすぐなれるからね。信仰の事態に年齢なんか問題じゃない。どしどし遠慮なく、私よりかもっと深くなつてください。



とにかく、そういうことになってしまった。だから、

「もうこのわがうちなる御霊になんと感謝するか」

という、そういう讃美歌をつくらなかったらいかんですね、新しく。

「我を愛するか」

と。キリストは私たちについて、贖罪をして永遠の生命をはっきりと顕して、

「さあ、この生命をお前たちの中に与えたぞ」

と。これがキリストの「十字架と復活と聖霊」の、切っても切ることのできない事態。これを私たちに与えてくれた。もうこれで愛は極まっている。そのように、もう他の何ものをもつても代えることのできないこの愛です。

なぜ、今のクリスチャンがこの福音の世界のもの凄い霊的な質、内容をもつともつと深く入れようとしなないか。すぐ、社会的実践だとか何とか、そういった行動のことばかり考えて、やれどうだこうだと議論しているんだよな。デイスカッションだの、話し合いだのと。もつと自分自身の存在そのものがもの凄いものになっていかなければダメです。

夏の特別集会という、ひとつのカイロスを皆さんがつかみそこなわないように。使徒的な霊的な次元を本当にものにしていく。もの凄い力が内側から働きますから、それから何でも具体的なことは自然に行きますよ。議論なんかいらん。自分でおのずからそうやっていきますから。大事なことは本ものを深く入れることです。

そういうことで、

「我を愛するか」

と。この「我を愛するか」と言っている人が、いかに私たちを他のものとは比較を絶する愛し方をもつて愛してくれたか。今も愛している。これからもうそうであるという、そういう人の言葉。そうしたらば、

「主よ、然り。わが汝を愛することは汝知りたもう」

というこのペテロの言葉が今度は、ペテロが言った以上に私たちの告白となってくるわけです。ペテロはこの時――しかし、ペテロのこの答えはまだ本ものの答えではない――まだちょっと浮いている。ペテロは使徒行伝を通らなければ、本当のペテロにならないんだから。まだしようがない。

主を本当に愛する。

「主を愛する」

ということとは逆にいうと、

「自分を憎む」

ということだよ。

「自分を、己を憎まざる者はわが弟子ではない」

と言われた。



## ●活殺自在

山岡鉄舟という人は幕末維新のころの第一の剣客だったそうだ。けれども、彼はついに一人も殺さなかったという。私はこないだ偶然に言ったことが、山岡鉄舟によつてやはり証明されていたのだから、私は驚いてうれしかった。

即ち、本当の日本刀は抜くためにあるのではない。本当の達人という者は剣を抜かない。抜かないで相手が参つてしまう。たとえ抜きましても、決して斬らない。斬る必要がない。相手が参つてしまう。宮本武蔵はちよつとまだ手前だったな(笑)。そんなこと言ったらわるいかもしれないが、宮本武蔵も最後は斬りたくなかつたんだろうと思いますけれども。

無剣の剣という。そうになると、これは本当に活殺自在ということになる。相手を本当に活かすのも殺すのも自在ということはどういうことか。イエス・キリストこそ活殺自在な人だったんですよ。

「へえ、イエスは殺しましたか」

と思うかもしれませんが。私たちは本当にキリストに殺さなければ活きはしない。だから、活殺自在という。

「もうキリストの他は何も要りません」

と、一切のものを棄ててしまう、そういうように私たちの中から

「他のものは要らん」

と。自分で自分の我欲を断ち切ることはできませんよ。ところが、かくもキリストに愛されてしまうと、もう他のものは要らんと。これは私たちを本当の意味においてキリストは殺しているわけです。自我欲から殺している。自我欲からキリストは殺してしまつて、

「ああ、もう自分自身なんか問題じゃない」

と、自分を問題としないような人間になってくる。これを無的と言つたでしょ。自分を無にしてしまう。

「ああ、無こそ楽しい」

というような、

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとく。一切の秘訣を得たり」

とパウロが言つた。そういつたような具合に、もう欲を殺してしまふ。これはいわゆる禁欲とか何とか言っているのとは違う。そして今度は、本当に変わると、

「万物をこれになお賜ざらんや」

とパウロが言っているではないですか。よろずのものまで一切を賜るほどに、もの凄いこのキリストの生命に入ると、非常に全世界に対して主体的な存在になっていく。こういうのが本当にキリストが私たちを殺し、また活かしている事態なんです。キリストの愛というのはそういうことをする。ただ私たちを可愛がつているような愛ではない。

「もうあなたの生命の他は要りません」



と言って、他は何も問題でなくなるところに一遍来なければ、

「信仰のなんの」

なんて言ったってダメです。「信ずる」とは、

「キリストの愛に、圧倒される」

ことである。信ずると言ったって、何か信仰をエトバス（何ものか）としているようなことではない。無教会なんていうのはせいぜいそのへんだ。だから、我々の今の、使徒的信仰の世界に入ってきて、もう行くところはないですよ、正直。

「行くところはない」

と言つても、なにも武蔵野幕屋ということと言っているのではない。パウロ、ペテロ、ヨハネが伝えているところのこういう現実の他、行くところはないじゃないですか。

## ●伝道と殉道

これが即ち、

「汝、我を愛するか」

「はい、あなたの他に私はもう天上天下何をか慕わん。ただ汝のみ」

ということ。詩篇の73篇かどこかに書いてある。これがパウロがローマ書8章の終わりの方で絶叫しているところの、キリストの愛に圧倒されている言葉でもあるわけです。

だから、この復活のキリストがかく問われたのも、

「やがて、しかし、私のこの問に対してお前は本当に答えることができるようになる」

と。まあペテロの答えなんか、キリストは本当に受けとつていやしない。まだ本ものではないから。そのうちにペテロが本ものになる。

17 <sup>みたび</sup>三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを

愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を

愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。

「本当に私を愛したら、お前はその愛をもって他の人を愛せざるをえなくなつてくるぞ」

と。「養え」とか「伝道せよ」とは本当の意味において

「人を愛する」

ということ。言葉でも行為でも何でもみんなこれが伝道です。全部、伝道。道を伝える。道を伝えるのは、無言であつても、いくらでも伝わる。「伝道」という言葉はいい言葉だよ。本当の道を伝える。

「わが羊を養え」

とは、





「私の愛を受けたら、お前は羊を養わざるを得なくなる。生命を本当に人に与えざるを得なくなってくるぞ」

ということ。

「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか」

と。非常に復活のキリストがかく畳みかけてペテロに印象付けた。ペテロは三度、キリストを否いなんだでしょ。だから、キリストはもう一遍ひっくり返して三度、キリストはこのペテロに印象付けた。この言葉は、ペテロは忘れるわけにいかない。そして今に、

<sup>18</sup> 誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、

されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん」

と。これは十字架の殉教の死です。私と同じように十字架の死だと。キリストを愛する者は、これは殉教の覚悟である。「殉教」と言っただって、なにも本当に人に刺されることばかりが殉教ではない。要するに、この道に殉じて死ぬことです。「殉道」といった方がいくらいだ。道に殉ずる。そんなことを言ったのは今日初めてだ。殉道者。私たちはキリスト道に殉ずる。それは殉じますよ、道には。

「道に殉ぜずして、いずこに本当の勝利ありや、いずこに栄光ありや」

と。こういうわけです。私はその点で一步も退かん。このパウロさん、ペテロさん、ヨハネさんの信仰を、この信を、この同質の信を、御霊の信が共通になってきて、もういかなるものとも、絶対に交換するわけにはいかん。それは聖霊の確信と、聖霊の権威は私たちをしてかく言わしめる。

その剣の達人がやはり非常に恵みの深い魂だね。夏になると鰻うなぎがたくさん殺される。鰻を毎朝、三匹ずつ鰻屋から買ってきて、そしてそれを四谷のお堀の中に放してやった。山岡鉄舟とはそういう人かと思って、私はじーんときた。そして、鰻を放す時に南無阿弥陀仏と称えたという。

とにかく、本当の魂というものは平伏おそしの、畏るべきものを畏れていた魂です。今、一番、今の若い青年に言いたいことは、

「畏るべきものを忘れるな、とんでもないことになるぞ」

と。三派全学連なんて、あんなのはしょうがない。畏るべきものを忘れて畏れなければ、必ずこれは刈り取るものを刈り取らざるを得ない。人間は絶対者の前に平伏ひれふすることを忘れたらお終いです。何でも要求することばかり考えている。とんでもない。

●パウロやヨハネはわが親友

そこで、キリストが三度、

「我を愛するか」

と問うた。そして、



「私の道にお前は行くぞ」

と、ちゃんとペテロの殉教の死までキリストは見えておられた。これはペテロはもはや死んでも死なないペテロになります。その時に神の栄光を現す。

19 是ベテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯

く言いて後かれに言い給う『われに従え』

私たちはもうこのヨハネ伝の最後にきて、

「我を愛するか」

という、このキリストの問を私たちは深く自分に問いかけられている問として、この「我を愛するか」ということに本当に、

「あなたの他に愛するものではありません」

と、そのことを言える人は一切のものを愛する人なんです。「あなたの他に愛するものはない」と言い切ることでできる人が、何ものでも本当に愛することのできる人です。それはアガペーの愛が、キリストの愛がその人を通して働くから。敵をも愛することができる。何となれば、敵を本当に救いあげることができる。

「ああ、無教会はパリサイだ、気の毒だ。何とかしてこれを救いあげてやりたいものだな」

と思って、私は胸の中が痛むよな、正直。今度は、『興文』に藤井先生のことを書いたけれども、私はそこまで本当は書きたかった。けれども、それを書くのはやめたよな、

「無教会のために痛む」

なんてね。やめたけれども、本当は書きたかった。

あなた方は非常に大事な線に来ているんですから、この無碍の一道を直進してください。そして、うんと深く、また極めて高く、また極めて広く。この深さと高さというものは矛盾しない。深くなればなるほど高くなる。そうすると今度は本当に広くなる。この三つの次元が不思議に展開する。それが本当に健全な、自在な、無限な、無量な、このヨハネ的生き方なんです。

ヨハネ伝だけは、私は本当に正直、本にしたいよな。他は何もしなくなっちゃいい。昔は「詩篇、詩篇」と思っていた。まあ詩篇もやるつもりですけども、いろんなものをたくさん書かなくなっちゃいいから。まあ折角やったから、エペソ、ピリピ、コロサイはパウロの獄中の書簡でね、この獄中の書簡は本当に、パウロさんがあれだけの患難を通つて、そして牢屋の中でかくの如き音信をしている。パウロはまた素晴らしい。何といつても、使徒たちの次元はいい加減な次元ではないですから。私たちは限りなく、使徒たちが慕わしい。

「あなたの親友は誰だね」

「パウロだよ、ヨハネだよ」

と、あなた方はそう言えるような人になってください。



「もう言えますよ」

なんて、いいですよ。パウロ、ヨハネが本当に親友となり、キリスト一切となる。

## ●信愛一如

キリストが私たちに

「我を愛するか」

と聞かれたら、もうただ平伏して、何も答えられないです。「愛します」なんて言えない。もう平伏すだけ。平伏して、もうキリストにしがみついていくばかりです。何となれば、「我を愛するか」と問われた時に何をもつて答えるか。わが胸のうちの、わが腹の中の聖霊が答えたもう。いいですか。わが腹のうちの聖霊が答え給うから、口先で、頭で何も答えなくていい。

「我を愛するか」

「はい、私のうちのあなたの御霊がお答えしております」

と。それだけです。もう私は極まつてしまつてどうにもならん。それがあなた方の信であり、あなた方の愛である。信愛一如です。

「私がわからないか。我を見よ」

と。いろんなことを言ってくるやつらに、あなた方はそう言いなさいよ、権威をもつて。もう、一言をもつて答えればいい。

私たちはその点でもつて一つです。ある本に、「グラウベン」(信ずる)ということとは「ゲロウベン」ということだと書いてあった。「ゲロウベン」という言葉は今のドイツ語では「誓う」という言葉ですけれども、この場合の「ゲロウベン」というのは、「ゲ・ロウベン」で、「誓う」という意味ではない。この「ロウベン」という言葉は、「ロウベン」(誉め讃える)、「リーベン」(愛する)、「レーベン」(生きる)、みんなこれは通ずる。もうキリスト一切として、キリストを誉め讃えることと同時に、愛することであり、同時に生きることである。これが「グラウベン」(信ずる)ということだ、

「信仰とは讚美し生きまた愛することである」

なんて書いてあるおもしろいドイツ語があった。全くそうなんです。ですからもう、一つです。

今度のエペソ書は凄いですよ。ある意味において、エペソ書は絶頂みたいところです。とても解説なんかできる世界ではない。もの凄いです。

そういうわけで、もう他に何も言うことはない。どうぞ、「我を愛するか」と。これは平伏して、御霊をもつて答える。その他になしと。おしまい。

